

仙 台 稲 作 情 報 2025（総括号）

宮城県仙台農業改良普及センター TEL：022-275-8410 FAX：022-275-0296

HP：https://www.pref.miyagi.jp/site/sdnk/ E-mail：sdnkt@pref.miyagi.lg.jp

1 令和7年産水稻生育期間の気象経過と水稻生育への影響

（1）水稻生育期間の気象経過（仙台アメダス）

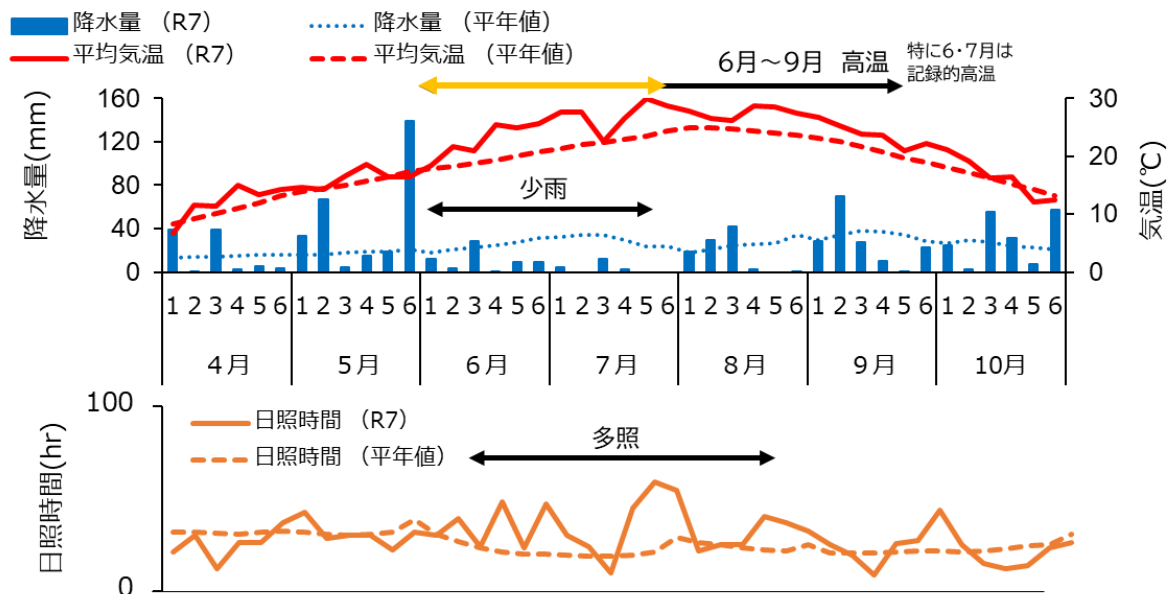


図1 気象経過

（2）水稻生育への影響

①育苗期

・4月最低気温高く、寡照

→ 苗質が良、活着良好

初期生育は移植時期によって差異あり

②出穂前

・6月～7月高温多照少雨（一部で水不足）

→ 生育伸展早く、6月下旬以降茎数少

→ 基肥窒素の消失が早い

→ 7月以降葉色やや淡い

③出穂後

・8月の最低気温並多照少雨、9月の高温

→ 出穂早い

→ 登熟良好、登熟歩合高い

→ 白未熟粒少、同割粒の発生

2 令和7年産水稻の作柄・品質

（1）作柄（東北農政局 令和7年12月12日公表）

・宮城県の10a当たり収量（ふるい目1.9mm）は525kg、作況単収指数は99でした。

・当普及センター管内を含む「中部」の10a当たり収量（ふるい目1.9mm）は510kg、作況単収指数は101でした。

(2) 品質 (東北農政局 令和 7 年 11 月 28 日公表)

- ・宮城県の令和 7 年 10 月 31 日現在の水稻うるち玄米の 1 等米比率は 93.4%となり、前年(最終)の 89.8%を上回っています。
- ・2 等以下に格付けされた主な理由は、「形質」49.5%、「着色粒」36.4%、「被害粒」8.4%でした。

※「形質」とは、皮部の厚薄、充実度、質の硬軟、粒ぞろい、粒形、光沢並びに肌ずれ、心白及び腹白の程度による。

3 管内の生育調査ほの生育状況等

(1) 生育ステージ

表 1 仙台管内及び県全体における田植・出穂・刈取状況

	仙台管内			県全体		
	田植	出穂	刈取	田植	出穂	刈取
始期 5%	5/5 (2日遅い)	7/24 (2日早い)	9/14 (3日早い)	5/5 (1日遅い)	7/25 (3日早い)	9/14 (5日早い)
盛期 50%	5/11 (1日遅い)	7/29 (3日早い)	9/26 (2日早い)	5/12 (1日遅い)	7/30 (2日早い)	9/25 (5日早い)
終期 95%	5/24 (1日遅い)	8/3 (3日早い)	10/10 (2日早い)	5/24 (2日遅い)	8/6 (4日早い)	10/10 (4日早い)

※平年は仙台管内及び県全体の直近 5 か年の平均値

仙台管内の田植盛期は、平年より 1 日遅かったですが、6 月以降の高温の影響で、出穂期は 3 日、刈取盛期は 2 日早くなりました。県全体の生育ステージも概ね同様の推移でした。

表 2 仙台普及センター管内生育調査ほにおける生育ステージ

品種	ほ場 (地帯区分)	移植日 (平年差)	幼穂形成期 (平年差)	減数分裂期 (平年差)	出穂期 (平年差)	成熟期 (平年差)
ひとめぼれ	仙台市宮城野区 (仙台湾沿岸)	5/22 (7日遅い)	7/11 (1日遅い)	7/24 (4日遅い)	7/31 (3日早い)	9/9 (3日遅い)
	大郷町 (北部平坦)	5/18 (6日遅い)	7/12 (3日遅い)	7/24 (3日遅い)	8/4 (2日遅い)	9/17 (4日遅い)
	仙台市泉区 (西部丘陵)	5/11 (-)	7/8 (-)	7/20 (-)	8/1 (-)	9/6 (-)
ササニシキ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	5/13 (平年並)	7/4 (3日遅い)	7/14 (2日遅い)	7/25 (3日早い)	9/1 (8日早い)

※平年差は直近 3 か年の平均値から算出

※仙台市泉区は今年度から調査しているため平年値なし (以下図表同じ)

近年の高温の影響で生育ステージの平年も早期化しており、全体的に平年より遅く推移した。一方で、7 月以降の顕著な高温により出穂期は、いずれの地点も成熟期は平年より早くなりました。

表3 県全体生育調査ほの地帯区分別生育ステージ（ひとめぼれ・ササニシキ 23 地点）

品 種	ほ場 (地帯区分)	移植日 (平年差)	幼穂形成期 (平年差)	減数分裂期 (平年差)	出穂期 (平年差)	成熟期 (平年差)
ひと め ぼ れ ・ サ サ ニ シ キ	北部平坦	5/12 (1日遅い)	7/7 (1日早い)	7/17 (2日遅い)	7/30 (3日早い)	9/7 (5日早い)
	南部平坦	5/13 (1日遅い)	7/2 (1日早い)	7/12 (3日早い)	7/25 (2日早い)	9/2 (2日早い)
	仙台湾沿岸	5/14 (平年並)	7/6 (3日早い)	7/18 (2日早い)	7/28 (5日早い)	9/6 (5日早い)
	西部丘陵	5/15 (1日遅い)	7/7 (平年並)	7/16 (2日早い)	7/31 (2日早い)	9/7 (6日早い)

※平年値は過去5か年の平均値から算出

県全体では、4月以降の高温の影響を受けて、生育ステージを通して平年より早く推移する傾向がありました。

(2) 生育状況（ひとめぼれ）

○草丈・稈長 生育期間中の高温で、期間を通して概ね生育量の目安より大きい値で推移しました。

○茎数・穂数 茎数は期間をとおして平年を下回って推移しました。

○葉色 3～4月の降水量が多く土壌からの窒素供給量が少なかったことや、高温により基肥窒素の減少が平年及び前年より早かったことから、葉色は平年よりやや低く推移し、出穂期前後の生育目安より低くなりました。

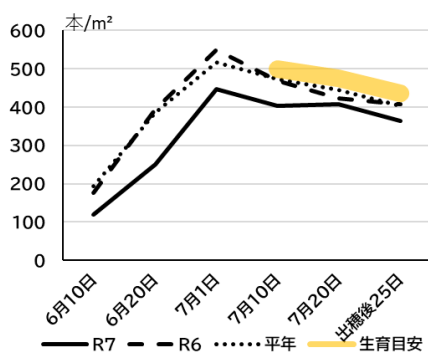


図2 茎数・穂数の推移（ひとめぼれ）

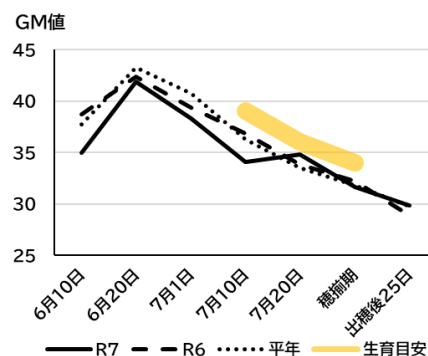


図3 葉色の推移（ひとめぼれ）

(3) 収量構成要素

○籾数 ひとめぼれでは穂数は平年よりやや少なく、一穂籾数は平年よりやや多かったため、m²当たり籾数は平年比 103%となり、収量構成要素目安の範囲内となりました（適正籾数：280～300 百粒/m²）。ササニシキでは、一穂籾数は平年より少なかったですが、籾数は目安より多くなりました（適正籾数：280～300 百粒/m²）。

○登熟歩合 いずれの品種も登熟歩合は平年より高い値となりました。

- 玄米千粒重 いずれの品種も平年並の数値で、粒が充実していました。
- 精玄米重 ひとめぼれでは、玄米千粒重、㎡当たり籾数が平年並で、登熟歩合が高かったため、精玄米重は平年比 110%となりました。ササニシキでは、㎡当たり籾数が平年より低かったものの、登熟歩合が高く精玄米重は平年比 109%となりました。

表 4 収量及び収量構成要素（仙台普及センター管内、ふるい目 1.9mm）

品種	ほ場 (地帯区分)	栽植密度 (株/㎡)	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/㎡)	一穂籾数 (粒)	籾数 (百粒/㎡)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
ひとめぼれ	仙台市宮城野区 (仙台湾沿岸)	15.8	本年	630	386	71	275	99.4	22.7
			平年比・差	130%	117%	89%	103%	124%	100%
	大郷町 (北部平坦)	15.0	本年	518	370	65	240	94.2	22.9
			平年比・差	93%	86%	101%	86%	109%	98%
	仙台市泉区 (西部丘陵)	14.8	本年	593	375	90	336	78.9	22.4
			平年比・差	—	—	—	—	—	—
	管内平均	—	本年	580	377	75	284	90.8	22.7
			平年比・差	110%	93%	109%	103%	109%	99%
ササニシキ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	14.7	本年	633	465	74	343	83.2	22.2
			平年比・差	109%	108%	81%	88%	123%	101%

※平年比・差は直近3か年の平均値から算出

(4) 玄米品質

整粒歩合は、ひとめぼれが 74.0%、ササニシキが 73.2%と平年より高い値でした。出穂後 20 日間の平均気温は平年よりやや高かったものの、登熟が良好で登熟歩合が高く、出穂後 40 日間の日照時間が多かったことが要因と考えられます。一方で青未熟粒の発生がやや多くなりましたが、これは登熟が良好に進み 2 次枝梗の登熟も進んだことが影響したと考えられます。

表 5 玄米品質（県内水稻生育調査ほ、古川農試作況試験ほ）

品種	地点数	区分	整粒 (%)	白未熟粒 (%)	乳白粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	胴割粒 (%)	青未熟粒 (%)	着色粒 (%)	タンパク質 含有率 (%)
ひとめぼれ	18	本年	74.0	3.8	1.8	17.5	1.3	3.0	0.1	6.6
		平年比	115.0%	54.0%	84.0%	80.0%	41.0%	142.0%	47.0%	97.0%
ササニシキ	6	本年	73.2	7.0	3.6	15.2	1.0	2.9	0.1	6.3
		平年比	129.0%	50.0%	72.0%	86.0%	21.0%	114.0%	11.0%	95.0%
つや姫	7	本年	76.3	1.6	0.6	17.7	2.1	1.9	0.1	6.8
		平年比	125.0%	41.0%	42.0%	72.0%	43.0%	34.0%	14.0%	98.0%

※平年差は直近3か年の平均値から算出

4 「にじのきらめき」展示ほの調査結果

(1) 生育ステージ

展示ほの移植時期は 5/22 で、出穂期は 8/12 となり、北部平坦地域県平均出穂期より 13 日遅くなりました。更に、成熟期は 9/26 でひとめぼれよりかなり遅く、登熟期や収穫期の分散につながる品種であると考えられます。

表 6 生育ステージ ※今年度から調査しているため平年値なし（以下同じ）

に じ の き ら め き	ほ場 (地帯区分)	移植日 (前年差)	幼穂形成期 (前年差)	減数分裂期 (前年差)	出穂期 (前年差)	成熟期 (前年差)
	大郷町土橋 (北部平坦)	5/22 (—)	7/17 (—)	7/27 (—)	8/12 (—)	9/26 (—)

(2) 生育の状況（普及展示ほ）

- 草丈・稈長 概ね順調に生育しました。
- 茎数・穂数 6月以降の高温少雨の影響により、茎数は栽培の目安より低く推移しました。
- 葉色 期間中 GM 値 30～37 で推移し、栽培目安（40 以上）より低くなりました。

(3) 収量構成要素

6月以降分けつが増えず、㎡当たり穂数が収量構成要素の目標値に比べて少なくなりました。穂数の少なさと登熟歩合の低下が影響し、精玄米重は 515kg/10a となりました。

表7 収量及び収量構成要素（ふるい目 1.9mm）

にじの きらめき	ほ場 (地帯区分)	栽植密度 (株/㎡)	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/㎡)	一穂粒数 (粒)	粒数 (百粒/㎡)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
	大郷町土橋 (北部平坦)	18.9	本年	515	312	75	287	75.1	23.9
			前年比	—	—	—	—	—	—
	収量構成要素の目標			650	400	80～82	320～330	85	23.5

(4) 玄米品質

白未熟粒率 3.1%で、ひとめぼれやササニシキより良い品質であり、出穂期以降の高温の影響は少なかったと考えられます。整粒粒比も 77.7%と比較的高い数値となりました。

(5) 総評

今回の栽培では、基肥 4.5kg/10a、追肥 1.5kg/10a（いずれも窒素成分換算）でしたが、葉色が淡く茎数が不足しました。農研機構の栽培マニュアル※では基肥 8～9kg/10a を推奨しており、地力の低い水稲連作ほ場では、十分な施肥が必要と考えられます。

白未熟粒は少なく、高温に対する耐性は品種特性どおり高いとみられます。また、出穂期や成熟期はひとめぼれ等より遅く、天候リスクや収穫時期を分散する品種として有効です。

一方、一部地域では斑点米カメムシ類の被害が多く見られました。成熟期が遅く、ほ場に長く残るため、クモヘリカメムシなど登熟期後半まで加害する大型種の被害が集中したと考えられます。ひとめぼれ等より出穂期が遅いため、にじのきらめきの出穂期に合わせた防除を確実にすることが重要です。

※[3988ed3e90e82114af6be1d7bdb47d01.pdf](https://www.affrc.affrc.go.jp/2019/03/20190301_01.pdf)（農研機構ホームページ掲載マニュアル）

5 乾田直播普及展示ほ（ササニシキ 慣行栽培・県認証基準栽培）の調査結果

今年度、これまでのササニシキ乾田直播ほ場（以下、慣行）に加えて、化学肥料施用量と農薬成分数を「みやぎの環境にやさしい農産物認証・表示制度」（以下、県認証）基準まで減らしたササニシキ乾田直播ほ場も調査しました。

【県認証基準(乾田直播) 化学肥料(窒素成分)：6 kg/10a 以下 農薬成分数：10 成分以下】

表8 乾田直播普及展示ほ耕種概要（施肥量・農薬成分数）

品種	地帯	場所	施肥量（窒素成分 kg/10a）				農薬成分数		
			堆肥	基肥	追肥	化学由来N量	除草剤	殺虫殺菌剤	合計
ササニシキ (慣行)	仙台湾沿岸	仙台市若林区	—	6.6	1.3	7.9	3	3	6
ササニシキ (県認証基準)	仙台湾沿岸	仙台市若林区	醗酵けい糞 4.2	5	1	6	5	3	8

(1) 生育ステージ

慣行の播種日は平年より7日遅い4月18日でしたが、その後生育期間を通して高温で推移したことにより生育が進み、出穂期は8月2日で平年並、成熟期は9月7日で平年より4日早くなりました。

表9 生育ステージ

品種	播種日 (平年差)	幼穂形成期 (平年差)	減数分裂期 (平年差)	出穂期 (平年差)	成熟期 (平年差)
ササニシキ (慣行)	4/18 (7日遅い)	7/12 (1日遅い)	7/22 (3日遅い)	8/2 (平年並)	9/7 (4日早い)
ササニシキ (県認証基準)	4/18 (-)	7/13 (-)	7/23 (-)	8/1 (-)	9/7 (-)

※慣行栽培の平年値は直近3か年の平均値から算出(以下同じ)

※県認証基準は今年度から調査しているため平年値なし(以下同じ)

(2) 生育の状況

- 草丈・稈長 慣行は平年よりやや小さく、作期を通し県認証の方が大きく推移しました。
- 茎数・穂数 出芽は順調で、苗立数は慣行210本/m²、県認証170本/m²となり、目標の100本/m²を上回りました。その後慣行は分けつが増えず、県認証の方が多く推移しました。
- 葉色 6月以降の高温の影響で肥料の溶出が早かったと推測され、生育期間を通して低く推移し、特に慣行はGM値30を下回るなど淡くなりました。

(3) 収量構成要素

慣行の穂数は327本/m²と平年より少なく、m²当たり粒数は147百粒と平年の46%となりました。登熟歩合以外のいずれの収量構成要素も県認証の方が高い数値となりました。

表10 収量・収量構成要素(ふるい目1.9mm)

品種	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	粒数 (百粒/m ²)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
ササニシキ (慣行)	本年	370	327	45.0	147	99	21.4
	平年比	64%	72%	64%	46%	126%	96%
ササニシキ (県認証基準)	本年	526	397	62.0	244	97.5	22.1
	平年比	-	-	-	-	-	-
乾直ササニシキ収量構成要素目安		550~650	420~460	78~83	320~350	75~80	22.7~23.1

※収量構成要素の目安は、乾田直播栽培用の基準を記載。

(4) 玄米品質

整粒粒比は慣行63.9%、県認証69.0%でした。また、白未熟粒は慣行11.5%、県認証7.1%でした。この差は、出穂25日後の葉色(GM値)が慣行は29.0、県認証は32.0で、登熟期の窒素栄養状態が影響したと推測されます。

(5) 総評

慣行ほ場では、複数年にわたり乾田直播栽培を継続しており、地力が低下していたと推測されます。近年の高温に加え、乾田直播栽培は畑状態が長く、土壌中の窒素流失が大きいことから、連作する場合は基肥を多めに施用する必要があります。県認証ほ場も同様の条件でしたが、堆肥施用の効果により、葉色や茎数に差が認められました。

県認証基準は、施肥量および農薬成分数がそれぞれ 6kg/10a（化成肥料 N 成分）以下、農薬成分 10 成分以下とされています。堆肥施用による窒素成分の補填や、大豆後ほ場への作付け、適期除草の実施、埋土雑草種子量の少ないほ場の選定などを行うことで、基準の達成は十分可能と考えられます。

6 今年発生が多かった主要病害虫

（病害虫防除所作成資料「水稻主要病害虫の発生状況」より一部抜粋）

病害虫	発生量	概要
ばか苗病	多い	<ul style="list-style-type: none"> 育苗施設(33施設)の巡回調査では発生地点率は69.7%、発病箱率は3.1%でともに平年より高かった。 巡回調査では、6月下旬は発生地点率20.0%で平年よりやや高かったが、発病株率0.03%で平年よりやや低かった。
紋枯病	多い	<ul style="list-style-type: none"> 巡回調査では、6月下旬に一部のほ場の畔際で、7月下旬には本田内部で発病が確認され、8月中旬以降発病が増加した。 紋枯病菌は高温多湿を好み、特に30～32℃の気温が発生に好適なため、近年の夏季高温で発生量が増えている。
斑点米 カメムシ類	(草地)多い (水田)多い 斑点米発生量 やや多い	<ul style="list-style-type: none"> アカスジカスミカメの発生盛期は平年よりやや早くなった。 ほ場内にノビエ等アカスジカスミカメを誘引する雑草があり、本田侵入を早めるとともに、本田での発生量が平年を上回った。 大型の斑点米カメムシ類「クモヘリカメムシ」が増加しており、一部地域では被害粒が多くなった。

7 令和8年産の作付けに向けて

高品質の良食味米の安定生産のため、気象変動に対応できる栽培管理の励行に努めましょう。

(1) 高温への対策

令和7年は前年に引き続き高温となりました。今後も高温年が続くことが予想されるので、高温対策のポイントを押さえて品質への影響を低減しましょう。

○高温対策のポイント

イ 水管理

出穂後5～15日の最低気温 23℃以上、または平均気温 27℃以上が連続する高温の場合、白未熟粒が多発し品質の著しい低下を招く危険があります。対策として、気温よりも温度の低い用水を十分に掛流す「掛流しかんがい」が有効ですが、用水量が少ない場合以下の2つの方策があります（掛流しかんがいより効果は劣ります）。

（イ）走り水により土壌をつねに湿潤状態に保つ「飽水管理」

（ロ）高温時の昼間はできるだけ深水管理とし、夜間は逆に落水管理とする「昼間深水・夜間落水管理」→午前9～10 時頃にかん水し、午後4 時頃に落水する管理。

ロ 適期追肥

出穂期以降の高温は品質を低下させますが、一方で穂揃期の期待葉色値を維持していたほ場では白未熟粒の発生が少ない傾向があり、葉色低下の防止が品質維持に繋がることがわかっています。品質を維持するため生育に応じた適量の追肥を心がけましょう。

(2) 適正粒数及び穂揃期の適正葉色の確保

イ 適正粒数

- ・ 収量、品質の安定性を確保するため、m²当たり粒数 30,000 粒前後を目標とします。
 - ・ 基肥窒素 1kg/10a 増肥 ⇒ 約 1,500 粒/m²の粒数増加
 - ・ 幼穂形成期の追肥 1kg/10a ⇒ 1,500~2,000 粒/m²の粒数増加
- } 効果が期待できます！
- ※ほ場及び水稻生育にあった施肥・追肥を実施しましょう。

ロ 適正葉色

- ・ 高温により肥料の溶出が早くなり、生育後半に肥料切れして葉色が淡くなっているほ場が散見されます。また、粒数過剰に加え穂揃期における葉色低下により、高温時の白未熟粒の発生や、くず米が増加する可能性が高くなります。
- ・ 反対に、適正粒数であっても穂揃期の葉色が濃すぎると玄米タンパク含有量が高まり、食味低下のリスクが大きくなります。

→生育に応じた適期（主に幼穂形成期・減数分裂期）・適量の追肥が重要です。

表 11 「ひとめぼれ」の適正粒数及び品質を維持するための生育目標値

	分げつ最盛期	最高分げつ期前	幼穂形成期	減数分裂期	穂揃期	出穂後 25 日
茎数・穂数 (本/m ²)	310~360	460~520	470~530	450~500	-	410~460 (穂数)
葉緑素計値 (GM値)	41~44	40~42	38~40	35~37	33~35	33 以下

(3) 病虫害防除の徹底

- 高温の影響で、一部病虫害が多発しやすくなっています。また稲の生育の早期化や病虫害の発生が早まる可能性があります。稲の生育を確認しながら、計画的に適期防除しましょう。

イ 紋枯病

- ・ 発病初期防除には箱施用剤が有効です。
- ・ 作期後半に多発する事例が多いので、発生が多いほ場は幼穂形成期と穂ばらみ期の茎葉散布を組み合わせることで防除しましょう。
- ・ 前年に多発した場合は、翌年も多発する可能性が高いので、確実に防除を行いましょう。
- ・ 高温多湿条件で発生が多くなるので、前年多発したほ場では栽植密度を下げ株間湿度の上昇を抑制しましょう。

ロ 斑点米カメムシ類

- ・ 毎年、斑点米カメムシ類による着色粒が原因で落等しています。
- 水田周辺の雑草地など発生源の草刈り、水田内や畦畔の雑草防除のほか、穂揃期とその7~10日後の2回を基本に薬剤防除を徹底しましょう。
- ・ 西部山間部や大郷町などでクモヘリカメムシが増えています。発生が多いほ場は2回目の防除の7日後に3回目の防除を行うと斑点米被害を大きく低減させることができます。

(4) 雑草対策の徹底

イ ほ場の整備

- ・ 湛水時の田面露出、適期を逃した除草剤散布などは雑草の繁茂に繋がるため、丁寧な代掻

き（荒代・本代の2回実施など）や畦畔補修、除草剤の適期散布を徹底しましょう。

□ 除草剤の適切な使用

- ・今年雑草が残ったほ場では、初期除草剤と初中期一発剤、初中期一発剤と中後期剤等を組合せた「体系除草」を行いましょう。
- ・近年の高温により、中干し後にノビエ等が急成長し結実しているほ場がみられます。ほ場をよく確認し、発生が予想される場合は中干し収量の時期に中後期剤を散布しましょう。

ハ 除草剤抵抗性雑草や難防除雑草への対策

- ・多くの草種でスルホニルウレア系除草剤（S U）の抵抗性個体群が確認されています。
→特定の除草剤成分の連用を避け、抵抗性個体にも有効な剤を使用しましょう。

（5）土づくりの実施

イ 深耕

- ・深耕による根域拡大は、背白粒等が減少し整粒歩合を向上させます。（目安：15cm 程度）

□ 有機物や土づくり資材の施用

- ・肥料コスト上昇や気象変動に対応するため、土壌診断に基づく施肥や有機資源（堆肥、稲わら等）を適量施用し、適切な肥培管理を行いましょう。
- ・完熟堆肥の連用は、稲わらすき込み等より白未熟粒の発生抑制効果があります。特に転換田は有機物が消耗しやすく土壌の可給態窒素も減少するため、施用を検討してください。
- ・ケイ酸質肥料は、受光態勢の改善や光合成能力の向上、リン酸質肥料は、低温時の活着促進や分けつ促進の効果が期待できます。

表 12 土壌タイプと土づくり肥料及び堆肥の施用目安

土壌タイプ	土づくり肥料		堆 肥 (t/10a)
	ケイ酸質 (kg/10a)	リン酸質 (kg/10a)	
黒ボク土	120～160	60～120	1.0～1.5
灰色低地土	60～100	40～100	1.0～1.5
グライ土	80～100	40～100	1.0～1.2
黒泥・泥炭土	120～160	60～120	0.8～1.0

（6）環境にやさしい米作り

- ・「みやぎの環境にやさしい農産物認証・表示制度（県認証）」では、移植栽培及び湛水直播栽培の農薬及び化学肥料の節減基準として、農薬有効成分8成分以下、化学肥料由来の窒素成分 3.5 kg/10a 以下と定めています。
- ・令和6年度に新たに「乾田直播」の区分が追加され、県慣行栽培の基準及び節減基準が移植栽培等と別に設けられました。

表 13 乾田直播栽培の節減対象農薬及び化学肥料の使用基準（県慣行の5割以下）

節減対象農薬の延べ有効成分数		化学肥料の施用量（窒素成分量 kg/10a）	
節減基準	県慣行栽培	節減基準	県慣行栽培
10	20	6	12